

絵日記と言えば夏休みの宿題。クレパスを握りしめ、夢中で塗った感触が残る。

それから半世紀、酒場で絵日記のようなものを描くのが癖になった時期がある。

ロックのウイスキーを数杯飲み、ほろ酔いあたりでミニ絵かきセットを取り出し描き始める。店にある酒ボトルやグラス、シェーカー、鍋、タバコに灰皿、ランプやスピーカー、カンカン、ナイフ、花、果物、ピ

ーナツ、蛇口や照明器具と総出演。その日目に付いたものをスケッチする。

カウンターの端に座り、誰とも話さず、黙々と描く満悦の時間。ペタンコ紙の上に次々とモノが現れる不思議。マスターや常連客はのぞき込むことなく、茶々も入れず放っておいてくれる。僕が壁を作ってい

るのか、皆が絵に無関心なのかは微妙なところ。

翌朝スケッチブックを開き、素面でもう一作業。新聞の写真や活字を切り抜いてストックしたもののなか

ら共振するものを選び、前夜の絵にカラーシユする。新聞のちよつと安っぽく、ザラツと艶のない印刷が好きだ。身の回りにあるモノ

絵日記

と、誰もが見ている新聞との関係性をキャッチし、グイと引き寄せ定着する。そのひらめきの妙に「ヨシッ

！」と高まり「ニヤリ」とほくそ笑む。

500枚ほどにもなっているが、そのまま新聞紙の調子を生かしたような本にできないかと一人計画。しかし、そのうちにと行動し

ない僕は、時間ばかりが経って実現には遠い。

モノを見て描くのがそんなに楽しいというのに、何十年も探り続けるモノのない絵となるとそうはいかない。何かに囚われ、どこかで構えてしまつのか。迷路にはまってばかりでは「ど

うなってるんだ！」と苦しい。なぜ同じような気分で筆を動かせないのか。

酔いの勢いに任せ、ためらいなく引張る線。みながる力の快感。「あれはいいじゃないか。酒のせいだけとも思えない。やはりモノの存在あつてのことか。何



万年も前から受け継がれた人の根っこにある、モノを表現したいという欲求。とは言っても、モノのある絵とない絵を差別するのもおかしいじゃないか。

具象画家とてモノに挑む闘いがあり、思い悩むのは同じ。ではどうすればいい。所詮、僕の具象はお遊びで楽しいだけ。そつだ、日々取り組む絵の中に少しでもある喜び。あの高揚感はずいぶんではないだろうか。自分の絵を生み出そうとするならば、グジグジせず大なる苦しみを受け入れるべし！と。

と言つてまたまた末練がましいが、なんだかんだは尻の河童。誘われるがままオートマチックに筆を動かす。願わくばそんな場所に自分を置いてみたい。

(吉田 淳治・画家)